

市場経済の力量を見くびるべからず

HAGIWARA, Susumu / 萩原, 進

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

69

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

307

(終了ページ / End Page)

316

(発行年 / Year)

2001-12-29

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002949>

市場経済の力量を見くびるべからず

—シンポジウム『経済の大転換と経済学の新しい方向…
金子 勝氏の問題提起をめぐって』の記録を読んで

萩原 進

この夏休み、ものすごい猛暑のせいで仕事の方は全くはかどりませんでした。『経済志林』第69巻第1号（2001年7月）に掲載されたシンポジウム『経済の大転換と経済学の新しい方向』の記録は、清涼剤を飲むかのように楽しく読ませていただきました。編集担当の川上さんから、短い感想文でもよいから何か書くようにと寄稿を依頼されておりましたので、一応感想文をしたためておこうと思います。

シンポジウムで問題提起を行なった金子君は、比較研の研究シリーズ11『現代資本主義とセイフティ・ネット』（1996年）にまとめられた研究プロジェクトの責任者を務め、この研究プロジェクトを進める過程で勉強した成果を、『市場と制度の政治経済学』（東大出版会、1997年）と言う書物にまとめられ、財政学者の立場から経済学界に対して様々な問題提起を行なって来ました。その後、年金問題その他のカレントな話題に関して、啓蒙書を次々に出版され、またテレビ朝日やNHKなどでテレビ・タレントとしてめざましい活躍をされてきました。その、今や時代の寵児となった金子君から、包括的に問題提起をしていただき、それを素材にして最近の経済と経済学について活発なディベートを行なうというのが、このシンポジウムの趣旨だったようです。

記録を読んで私が抱いた感想は極めて多岐に渡りますが、時間が余りあ

りませんので、論点を重要と思われる二点に絞って、短いコメントをしたためておく事にします。シンポジウムの参加者〔佐藤、黒川、増田、竹田その他〕の発言の中にも、傾聴すべき意見が多々あり、特に山本君と佐々木さんの発言はとても面白く思いましたが、今ここでコメントをする余裕は御座いません。従って金子君の問題提起に、話を限定したいと思います。

1. 全盛の“市場主義”に対して取るべきスタンスについて

金子君の議論は、最近とりわけイギリスにおけるサッチャー政権の登場（1979年）以降経済学と経済政策思想の両面において見られる、ハイエク・フリードマン流の自由主義の隆盛に対する批判を、主たる目的にしているように見受けられます。ハイエクとフリードマンは、保守的な自由主義者の社交クラブとして有名なモンペルラン協会の会員であり、第二次大戦後に西側世界を席捲したケインズ経済学の積極的な国家介入主義と社会主義（社会民主主義）に対して、それらの思想を、人々を国家への隷属に導きかねない危険な思想とみなして、厳しく糾弾してきました。ハイエク・フリードマンらの経済理論や社会思想は、ケインズ理論（主にアメリカなどで流行した）やマルクス理論（主にソ連、日本などで流行した）がときめいていた1960年代までは、あまり影響力をもっていませんでした。しかし1980年代以降の世界の動きを見ると、ハイエク・フリードマン流の自由主義が、ケインズ主義に取って代ってしまい、大袈裟に言うなら、経済学と経済政策の世界を席捲しつつあるかのような感じをさえ抱かざるを得ません。当然の事ながら、自由主義思想の全盛の陰で、色褪せた社会主義とケインズ主義は最早臨終かと思われるほどの衰弱ぶりを示しています。マルクスやレーニンの著作は、今や殆ど誰も読まなくなってしまっており、ケインズ経済学の影響力も、財政危機の深刻化とともに急速に低下しつつあります。

ハイエクらの自由主義思想は、周知のように、自由な市場経済こそが望

ましいと言う“市場主義”の主張を重要な構成部分にしております。勿論ハイエクらは、アナーキストではありませんから、市場と並んで〈法と国家〉が果たす役割も重要視しておりますので、ハイエクらリバタリアンの思想や経済理論を“市場万能主義”とか“市場原理主義”と呼ぶのは不適切きわまりない事と思います。しかし、自由を担保する最も重要な社会制度を〈市場〉と〈コモン・ロー〉に求め、この両制度が縦糸と横糸になって織り成される〈自生的な社会秩序〉こそが人々に最も豊かな自由の恩恵をもたらす、と言う主張に立っている事はまちがいありません。〔ですからハイエクの思想と理論は、アダム・スミスの自然的自由の体系としてのCivitas論のリバイバルにすぎないわけです〕。従ってその意味で、ハイエクらの自由主義は“市場主義”に立脚していると言ってよいでしょう。金子君の議論は、ハイエクやフリードマンらの自由主義〔リベラリズムではなくリバタリアニズム〕の全盛に対して、カウンター・パンチをくらわせて、介入主義または社会主義の復権を図ろうとしているように思われます。介入主義や社会主義が衰退期にはいった今日において、あえて介入主義や社会主義の弁護人の役を買って出るには、大変な勇気と知的エネルギーを必要とします。その大役をあえて引き受けようとしている金子君の蛮勇に、まず称賛の拍手を送りたいと思います。

前述のように、政府介入主義や福祉国家論（大きな政府）を支持する潮流は、経済政策や政治思想の領域において1960年代までは主流の地位を維持しておりましたが、その後世界は大きく様変わりをはじめて、“ケインズの時代”は終焉期に入りました。1960年代末に西側諸国はインフレーションに見舞われ、固定為替レートの維持も困難になり、戦後の世界経済の枠組であったブレトンウッド体制にヒビが入ってから以降、世界はケインズ主義に別れを告げて徐々に“市場主義”（レッセ・フェール・レッセ・パッセ）への回帰を始めました。まず1970年代の後半にアメリカのカーター政権が、ニュー・ディール体制の解体に着手し、続いてイギリスのサッチャー政権が福祉国家の解体作業を開始したのです。これまでの政府介

入主義の清算が、小さい政府のスローガンの下に進行して行きました。1979年には中華人民共和国が、突如〈改革開放〉の掛け声の下に社会主義から市場主義への転換を開始し、世界をアッと驚かせました〔現在中国では、“社会主義市場経済”と言う変な言葉が使われているようですが〕。さらに、1989年～1991年には驚天動地の大事件が、これでもかこれでもかと連続的に起こったのでした。東欧とソ連の崩壊と“市場経済”への移行がそれです〔その結果最近、市場経済への“移行の経済学” Transition Economics というこれまたオカシナ研究分野が、新しく登場するに至りました〕。最後の極め付きは、我が日本であります。1980年代に、日本の官民協調・労使協調システムは世界の注目を浴び、“移行の経済学”の理論モデルとして高い評価をさえ受けました。マレーシアや韓国は、日本の高度成長に注目して、日本モデルの導入に励みました。ところが、1990年代の〈失われた十年〉(Lost Decade)を経て、日本は〈官民協調経済〉システムを速やかに清算してアメリカ流の純粋“市場主義”経済に移行しなければ滅亡してしまうぞ、と言った恫喝に近い評論が横行するに至り、世の中の空気(ニーマ)が一挙に変わってしまいました。その結果、〈自民党解体〉を公然と主張する小泉・自民党政権の登場と言う、まことに奇妙キテレツな政治現象が起こってしまいました。〈聖域なき構造改革〉による小さい政府の実現と“市場主義”を掲げる小泉政権に対する国民の支持率は、なんと90% (!!)にも達したのです。鉄の女のサッチャー政権は、イギリス労働運動の弱体化を図りましたが、炭労などの激しい抵抗に逢って、改革は難行しました。しかし小泉政権が掲げた〈痛みを伴う構造改革〉の方は、不思議にも国民の圧倒的な支持を得ており、そうした熱狂的な支持を背景にして小泉政権は、公共部門の中で大きな比重を占めている公益法人を一挙に〈廃止または民営化〉してしまうと言うのです。構造改革に反対した共産党と社民党は、参議院選挙で惨めにも完敗しました。我が日本においても、ケインズ主義の補整的財政政策論は全面否定されてしまい、フィスカル・ポリシー論者である元政調会長の亀井氏らは

“守旧派”として断罪されてさえます。日本は、“市場主義”を玉座に座らせて拝みながら、前王であった〈日本的経済システム〉を死刑に処そうとしているのです。

ここで金子君の問題提起に触れたいと思います。金子君はまず、要素市場の“市場化の限界”論に立脚して、国家による市場への介入の〈必然性〉を主張し、国家介入主義を擁護します。この金子理論によれば、政府による市場への介入の大半を否定して“規制撤廃”の必要性を強調する（黒川君ら）“市場主義”者の主張は、実にけしからん危険極まりない主張だと言うことになります。そしてその種の“市場主義”的な自由化と規制撤廃が実際に引き起こした危険な事態として、バブル経済、金融資本市場のシステミック・クライシス、ロシア経済の大混乱などを指摘しています。金子君は、〈野放しの市場経済は、上手くいくはずがないよ。政府が、市場経済の制度的サポーターとして機能しなくなり、市場が野放しに無規制に動くと、市場経済は大混乱に陥るしかないのだよ〉と言っておるわけです。

しかし私は、ハイエクのような“市場主義”者ではありませんが、金子君の主張には賛成できません。その理由は以下の通りです。“市場主義”に沿って、金融の自由化や規制の廃止や競争の導入が行なわれ、そのために経済の不安定性が高くなったのは事実かもしれません。しかし金子君の主張は、“市場主義”的改革がもたらすマイナスの側面だけを重要視し、プラスの側面を著しく軽視しているように思われます。例えば、中曽根内閣の時に行なわれた国鉄の分割・民営化がその良い例だと言えます。日本国民の大多数は、国鉄がJRになったおかげで国鉄が再建され国民の暮らしがよくなったと思っているのです。中曽根内閣の“市場主義”的な政策によって実現した改革は、プラスの側面がマイナスの側面を大きく凌駕していると、人々が身をもって体験した結果、人々によって強く支持されてきたのではないのでしょうか。お隣の中国では、近く国有企業の大半を民営化するようですが、中国政府のこうした〈痛みを伴う〉“市場主義”的改革に対して猛反対の動きが見られないのは、中国人民がこのような“市場主

義”的改革を支持しているからだと思ひます。

金子君の議論は、“市場主義”の強さと良さをあまりにも過少に評価し、“市場主義”の危うさと汚点をあまりにも過大に評価し過ぎていると思ひます。勿論人類は既に、1930年代の大不況のような“市場主義”の大失敗とも言える事態を、何度か経験しております。ヘロドトスによると、歴史は必ず繰り返すそうで、今後世界経済が再び破局（カタストロフ）に陥る可能性がゼロだとは言えません。いや、そのような事が必ずいつかは起こるでしょう。しかし人類は、そうなっても“市場主義”と決別する事はないであろうと思ひています。なぜなら、人々は“市場主義”に代る様々な〈オルターナティブ〉（“国家主義”，“社会主義”，“統制経済”，“福祉国家”など）に、あまり魅力を感じなくなってしまうからです。特に旧ソ連の人々は、未だに“市場主義”には違和感を感じているようですが、〈収容所群島〉（＝社会主義）はもうコリゴリだ、アレよりは“市場経済”の方がましだと思ひているはずで、ですから金子君の意向に反して、“市場主義”は場当たりの（アド・ホックな）パッチワークによって綻びに継をあてつつ、しぶとく生き延びていくのではないのでしょうか。

まとめると、金子君の問題提起に対して感ずる疑問の第一は、“市場主義”の光と陰の両面をバランス良く見ておらず、陰の面ばかりを言い過ぎている、と言うことです。第二に、金子君は理論闘争の敵を見誤っているように思われます。君の論敵は、ハイエクやフリードマン或いは黒川君や竹中平蔵君であって、“市場主義”に批判的な新制度学派ではないはずで、青木さん、小池さん、コース、ノースなどの学者は、君の同盟軍だと私は思ひます。それとも君は、“日本的経営”や“長期雇用”を高く評価する議論が気に入らず、それを論駁したいだけなのでしょう。

2. 〈市場化の限界〉論の誤謬

金子君の理論面での問題提起は、生産要素の〈市場化の限界〉論に集約

することができるかと思います。金子君の議論は、次のような三段論法から構成されています。

- (1) 大前提：要素市場は、本質的に市場としての限界を持っている。
- (2) 小前提：要素市場は、国家の制度的セイフティ・ネットによって支えられる事によってはじめて、財市場と同等の完備した市場になりうる。
- (3) 結論：セイフティ・ネットを除去するような規制撤廃や自由化などの“市場主義”的改革は、経済の不安定性を高める危険性がある。

金子君の立論（以下金子理論と呼ぶ）から受ける第一印象は、〈金子君は宇野経済学とポラニーから強い影響を受けていますな〉と言うことです。

周知のように、宇野弘蔵先生は『農業問題序説』で、“資本主義にとって農業は苦手である”と言う有名な指摘を行っています。宇野先生は、農業を資本主義のアキレス腱と考えていたのではないかと思います。その理由は、農業が〈土地〉と言う〈自然〉を中心的生産手段にしている上に、日照時間や降雨量といった自然条件に強く左右される産業であるため、市場における価格付けを通して行なわれる〈調整〉機能に〈限界〉がある、と考えておられたからだと思います。また宇野先生は『恐慌論』において、これまた有名な〈元来商品ではない労働力が、資本主義の下で商品化している無理〉に基づいて周期的恐慌が起こるという景気循環理論を展開しています。〈労働力商品化の無理〉論は、原理論の中では、景気循環と周期的恐慌を説明するための理論仮説の役割しか与えられていません。しかし、『経済政策論』においては、資本の蓄積様式の変化—資本主義に特有の人口法則の変化—経済政策の変化、と言った論理的展開を通して、〈労働力商品化の無理〉論には、国家の役割の変化を説明する重要な〈説明変数〉の地位が与えられています。資本の商品化論は、宇野原理論においては、拝金主義（マモニズム）社会としての資本主義を総括する〈それ自身に利子を生む資本〉の登場と商品化によって、資本主義の物神生を完成させる役割が与えられています。ですから資本の商品化には、〈限界〉性や〈無

理)性は想定されておりません。宇野先生は、景気循環の実態の基礎を重視しており、〈貨幣的景気循環論〉には組しませんでした。

ポラニーの理論に関しては、言及すべき点が多々ありますが、時間がありませんので省略させていただきます。ただ、私のような労働経済学と労使関係論の専攻者は、ポラニーからたいそう大きな影響を受けたことは事実であります。ポラニーの『大転換』によれば、資本主義の市場経済はいずれ崩壊せざるを得ない運命にあり、ソ連の社会主義とドイツ・イタリアのファシズムの台頭はその現れだと考えられています。ポラニーが、資本主義の未来に対して強いペシミズムを抱いていたのは、資本主義のシステムが〈土地〉と〈労働力〉と〈金〉の商品化に立脚しているにもかかわらず、この三つは元々商品化の適性に欠けているが故に、資本主義はシステムとして本質的に安定性に欠ける、と考えていたからだと思います。ポラニーの議論は、資本主義のアキレス腱を鋭く抉り出している点で、高く評価できます。しかし、市場機構全体の分析ができていないために、ポラニーは、市場経済のバイアビリティ（生命力）を見誤ってしまいました。言うまでもなく実際に崩壊してしまったのは市場経済の方ではなく、ナチスやソ連の社会主義経済の方でした。

資本主義経済が安定成長できるためには、資本蓄積に必要な労働力の予備軍が必要です。労働力の予備軍がなければ、資本蓄積に必要な追加的労働力を調達することができません。すなわち資本主義経済が成長軌道を維持するには、一定の失業人口を有していなければなりません。ところで失業者は、失業中に所得ゼロでどうやって暮していけるのでしょうか。セイフティ・ネットがなければ、必ず社会不安が起こってしまって社会は騒然となることでしょう。ここに資本主義社会において、社会保障制度と言うセイフティ・ネットが登場して来る必然性があるのです。〔資本主義にとって失業保険制度は、不可欠な制度なのである。但しポラニーの場合は、資本主義の労働市場が必要とするセイフティ・ネットは、失業保険ではなく、負の所得税のような賃金補助制度が想定されている〕。労働市場は、金子

理論の言う通り、それ自体が市場として限界を有しており、セイフティ・ネットと言う制度の領域によって補完される必要のある市場であると言えます。

資本主義は、市場の見えざる手だけで運行できるわけではありません。国家の支えがなければ、資本主義は一日たりとも生きていくことはできないのです。法秩序を維持したり、失業者や貧困家庭を保護したり、小農の土地所有権を保護したり、通貨を供給したり、伝染病から社会をまもったり、小学校を作ったり、などなどの仕事をする国家による支えがあって始めて、資本主義は発展的に運行していくことが可能なのです。従って金子理論は、その意味で基本的に正しいと私は考えます。

以上の議論を踏まえて金子理論を点検してみると、金子理論の致命的な弱点は、〈市場化の限界〉論のうち、〈土地〉と〈労働力〉には殆どなく、もっぱら〈資本〉にあるように思われます。そもそも金子君の用語法には、エコノミストとして首を傾げざるを得ません。第一に、生産要素としての〈資本〉（貨幣？）と言った俗流経済学の間違った用語法を、平気で用いているために、〈資本〉の〈市場化の限界〉に関する議論がメチャクチャに混乱してしまっているのです。第二に、貨幣市場と資本市場の不安定性にかかわる議論の詰めが不十分であり、そのために〈資本〉の〈市場化の限界〉論にまったく説得力がなく、（例えば外為市場の）不安定性を和らげるためのセイフティ・ネットに関しても、説得力のある政策提言がなされていません。

新古典派経済学の教科書に出てくる、三大生産要素の〈土地、労働、資本〉の〈資本〉とは、言うまでもなく〈資本財〉のことです。〈資本財〉の一例を挙げると、会社の事務員が事務所で使っているパソコンや、旋盤工が会社の工場で使うマシニング・センターがそれです。自宅で私的に使っているパソコンは〈消費財〉で、会社で仕事用に使っているパソコンは〈資本財〉だと言うのです。（こんな初歩的なことを書いてすみません）。従って、要素市場としての〈資本市場〉は〈資本財市場〉のことですから、

金子君の用語法によると、パソコン市場には〈市場化の限界〉がある、と言った変な議論になってしまうのです。俗流経済学は、常に、〈資本財〉の事を〈資本〉と平然と言い換えますが、我々エコノミストは、正確な〈資本〉概念を保持しておかねばなりません。

金子君の議論の問題点は、貨幣市場と資本市場の安定条件に集約されると言っても良いでしょう。まず貨幣市場の安定条件に関して、管理通貨制の下で健全通貨を供給するために中央銀行が従うべき、金融政策のルールが解明されねばなりません。バブルは、中央銀行の金融政策の失敗によって起こります。次に資本市場に関して、国際資本移動に規制を加え、為替レートの変動をあるゾーン内に包囲する必要があります。この点については、鶴見君を中心にして行なわれた比較研の研究プロジェクトによって、かなり高いレベルの研究成果がすでに蓄積されています。為替市場に関して、国際金融論の専門家の意見は、今尚収斂を見ていませんが、ウォール街の投機師の餌食にされて金融システムを破壊されてしまったタイや韓国や日本が、再び餌食となる愚を繰り返さないために、国際金融市場の規制の研究は焦眉の課題です。金子君の今後の研究に期待したいと思います。

(2001年9月10日)